

水道ジャーナリスト 有村源介の

源流 本流 汽水城

NO.19 真夏の庄内平野 その1 酒田～鳥海山



最上川河口では自衛隊が訓練していた



酒田港に停泊していた豪華客船と荷揚げされた風力発電設備（Ⓢの円筒）

この夏、庄内平野を2度にわたって訪問した。最初は酒田市～鳥海山、2度目は鶴岡市である。酒田市は2度目の訪問で、最初の訪問は1975年頃だから40年以上前になる。日本下水道協会の東北地方支部総会の取材だった。水道協会においても下水道協会においても、地方支部総会はその地方支部の1年の活動を報告し、決算を承認・予算を決定する唯一の機会であり、問題点として議論されるべき課題は、ここで会員提出問題として、まず、提起しなければ、全国総会や大会で共通の課題として議論の対象にならない。主務省の見解を聞ける機会も、地方においてはそうそうあるものではない。

そのことは十分承知していてもなお、取材者にとって、地方支部総会程、退屈極まりない取材対象はない。入社して2～3年目の駆け出し記者にして既にそう思わせるものだった。写真を1枚撮れば記事は書ける、「この記者は会議に出席していない」と喝破できる読者はいない、と踏み、前日、鳥海山の山麓にある山荘に宿泊し、会議の終了間際に写真を1枚だけ撮って帰京した。この機会を逃したら、庄内平野の独立峰・鳥海山を眺め訪問できる機会はないのではないかと思ったのだ。果たして、再訪したのが40年数年後の今夏であったことを考えると、直感は当たっていたと言える。

今夏、酒田市と鳥海山を訪問した理由は、そういう思い出があったから、ということでもなく、特段の理由があったわけではない。敢えて言うなら、我が家は庄内平野の北端・遊佐（ゆぎ）米をはじめ、庄内平野の食材を購入しており、それが希薄な理由らしい理由と言える。地方空港は「たんちょう」（釧路）や、コウノトリ（但馬）、「縁結び」（出雲）、「パンダ」（南紀白浜）と、愛称で盛り上げようとしているようで、その効果のほどに関心はないが、「おいしい庄内空港」は分かりやすい。

鳥海山麓の温泉ホテル「鳥海山荘」は、小ぎれいな山荘ホテルに建て替えられており、緑と木々の香り、絶え間ない鶯の声、静かな沼、子供の時以来久しぶりで見た草むらのマムシ、「猛禽類保護センター」見学等々、平凡な1日を過ごしたが、翌朝、酒田の街に降りると今日らしい空気に包まれていた。それは、豪華客船が酒田港に寄港しており、最初に目にしたことは、駅前のタクシープールからすべての車が出払って、閑散としていた風景であった。どのタクシー会社に電話してもコールに出ないか、「本日、車はありません」という答えばかりだったが、運よく観光タクシーを3時間ばかり借り切ることができた。

運転手兼ガイド氏によると、豪華客船が寄港することになって、経済効果が期待されたが、元々宿泊は船内なので旅館・ホテルに恩恵はないこと、バスをチャーターして山寺など山形県内の有名観光地へ出かけることが多いので、酒田市内は素通りすることが多いこと、等を解説してくれた。それでも、酒田訪問の目当ての1つだった「土門拳記念館」は大勢の欧米系の観光客で賑わっており、窓口ではクルージングの客かどうかを確認してから発券していた。中国・韓国、中には日本人客もいるようだった。

展示作品のタイトルはすべて日本語のみで、その部分は英語圏の観光客の需要には応えられていなかった。訪問時には土門拳の作品だけでなく、企画展として林忠彦の作品が展示されていた。

戦後の日本の情景を切り取った作品のみならず、著名人のポートレートが多数展示されていた。これは海外からの観光客にはまったく意味のない展示だろうと思われたが、はたして中央の休憩所では、多くの客が所在なげに足を投げ出していた。

既に晩年に差し掛かっている私にとっては、その1枚1枚がすべて強烈な戦後史のメッセージであり、感傷も含めて飽きることがなかった。

そして、著名写真家の作品にうとい私が、林忠彦の作品として唯一認識していた、銀座のバー「ルパン」における太宰治のポートレート—高い丸椅子に足を持ち上げて身を傾けて話し込む太宰—があった。全集で文庫本で関連本で、幾度となく眺めたその写真を、印刷物ではなくオリジナルのネガから印画紙に焼いたそれを初めて見た。

「これがルパンでの太宰治か」——半ば陶醉気味の私は「さっさとしなさい」と連れ合いに追い立てられるように、次の訪問場所である山居倉庫に向かわなければならなかった。